

## 越前朝倉氏と九頭竜川合戦



合戦の舞台となった九頭竜河畔中郷付近（現福井市中ノ郷町）

戦国時代前期の永正3（1506）年7月、越前守護朝倉貞景<sup>あさくらさだかげ</sup><sup>※1</sup>に対し、藤島超勝寺・和田本覚寺を中心とした越前の真宗本願寺門徒による大規模な一向一揆が起こった。この合戦の経緯は、朝倉氏の興亡を主題とした軍記である『朝倉始末記（賀越闘諍記）』による他はないが、それに呼応した加賀の一揆衆と結ぶ北陸諸国の門徒30万が越前に侵入し、九頭竜川以北の坂井郡の村々に放火して、兵庫・長崎付近（現坂井市内）に陣を布いたとある。

### 越前一揆の蜂起と朝倉勢の陣容

それに対し朝倉氏方では、「当方一大事ノ合戦ナリ」とし、貞景の叔父で敦賀郡司の教景（宗滴）<sup>のりかげ そうてき</sup><sup>※2</sup>を総大将として、これにあたらせた。越前府中の本願寺派の坊主衆が逸早く一揆に加担していたことから、教景は、大坊主のおおぼうず<sup>いちはや</sup>の大塩門宮寺・石田西光寺らを生捕りにして一乗谷の朝倉館に連行する一方、久末昭厳寺・荒川興行寺などを召捕らえ、籠舎に閉じこめた。

一揆勢は、7月14日に大野郡で最初に蜂起し、次いで坂井郡に加賀から侵攻した大軍は、赤坂・豊原・岩屋などで、朝倉方の白山豊原寺衆徒らと合戦を重ねながら南下し、7月末には九頭竜川を隔てて朝倉軍と

対峙した。

一方朝倉方は、総大将の朝倉教景率いる3000余騎が、足羽郡の中郷（現福井市中ノ郷町）に本陣を布いた。さらに坂北郡の鳴鹿表（現永平寺町鳴鹿山鹿）には、朝倉景職<sup>かげもと</sup><sup>※3</sup>を大将に3300余騎、高木口（現福井市高木町）には、坂井郡の諸勢である勝蓮花右京進・堀江景実など2800余騎が、それぞれ九頭竜川の河畔に陣を取っている。また中角渡（現福井市中角町）の受手には、山崎長門守の嫡子小次郎（祖桂）ら2000余騎が黒丸村（現福井市黒丸町）に布陣したが、朝倉勢は全軍併せて僅か1万1100余騎に過ぎなかった。

### 九頭竜河畔の合戦と一揆軍の敗退

次いで加賀の石河・河北両郡と越前の一方向一揆勢5万7000余騎の軍兵が、中角渡で川渡りを開始した。この機を捉え、8月2日の早朝寅刻（午前4時）より密かに黒丸の要害を出て敵方の渡河を待ち構えていた朝倉方の山崎祖桂が、不意を衝いて一揆軍に襲いかかり、加賀一揆の大將河合藤八郎と山本円正らの頸を討ち取ったため、一揆勢は色を失い混乱した。

また九頭竜川河口方面に向かった加賀の能美・江沼郡と越中の大坊主ら8万8000余騎も、馬筏を組ん

※1 越前朝倉氏第9代当主。越前は管領家斯波氏が守護職、朝倉氏は守護代であったが、斯波氏の失脚や応仁の乱に乗じ7代朝倉孝景が越前一国を事実上支配。貞景の時代に戦国大名としての地位を確固たるものとし、11代義景に至るまで5代にわたり一乗谷を中心に繁栄を極めた。

※2 7代当主朝倉孝景の末子。甥の9代朝倉貞景、10代孝景（宗淳）、11代義景の3代の当主を補佐する宿老として武名を轟かせた。

※3 朝倉氏の家臣。朝倉貞景の娘を妻に迎え、朝倉同名衆（一族）のなかでも高い地位を得る。九頭竜川の合戦で活躍。

で渡河を試みるも、高木要害の朝倉軍に待ち受けられ、半時ばかりの激戦の末に、六尺有余の法師武者の法花院（甲斐氏一族）らが討ち取られた。さらに鳴鹿口では、加賀北部の一揆衆と越前一揆の超勝寺・宇坂坊主（本向寺）を大将とする5万5300余騎が、馬を九頭竜川に打入れ渡河を企てるも、朝倉景職軍との間に睨み合いが続いていた。

そうした状況の中で、中郷の渡へ、加賀石河郡の河合藤左衛門・洲崎慶覚・鏑木常専らの諸将や越前一揆の大将和田坊主（本覚寺）など10万8000余騎の大軍が、関音地を響かせ押し寄せた。これを迎え撃つ朝倉教景は、3000余騎を密かに二手に別けて渡河させ、不意を衝いて一揆軍の主力を撃破した。この中郷口の敗北により、諸口の一揆軍も総崩れとなり、加賀に敗走した一揆勢は、10万にも足りない数となっていた。

その後、加賀・越前の一揆との総力戦で勝利した朝倉氏は、吉崎道場<sup>※4</sup>をはじめ和田本覚寺・藤島超勝寺以下の越前国内の本願寺派の寺院・道場をことごとく破却し、門徒らを追放して資財を没収した。ここに九頭竜河畔の合戦は、朝倉氏の大勝利で幕を閉じた。

また10月10日になって、越前一揆の牢人衆が、豊原寺を攻めて九頭竜川以北の奪回を企てたが、朝倉勢によって撃退されており、翌永正4（1507）年8月頃にも、越前牢人の和田本覚寺や藤島超勝寺らの大坊主が、加賀衆とともに坂井郡の帝釈堂口（現坂井市金津町）に侵攻したが、朝倉軍に敗北し、加賀に逃げ帰っていた。

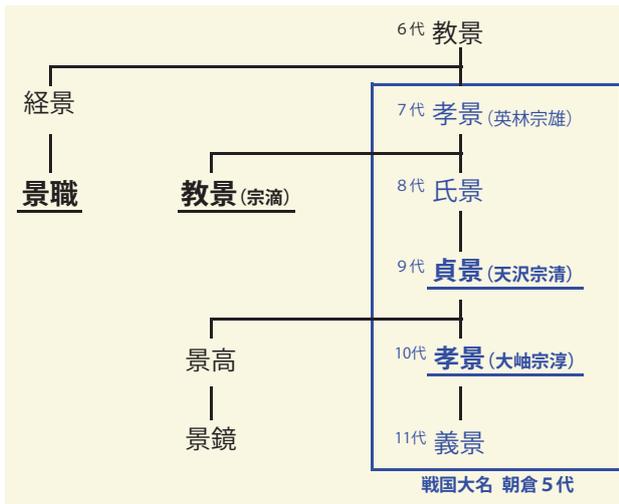
朝倉氏は、永正3年の越前一揆の蜂起を契機に、国

内の海陸に関所を設け、加賀国境の通行を遮断した。このため京都の荘園領主は、加賀からの年貢進納の遅滞が重なり難渋する。そこで室町幕府や朝廷が守護の朝倉孝景（宗淳）と交渉し、十数年後の永正15（1518）年になって、ようやく北陸道の往来が開かれた。

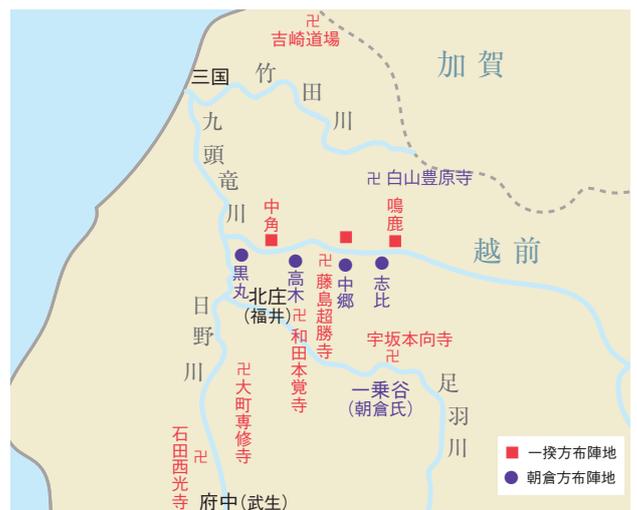
## 一揆蜂起の政治的背景

ところで九頭竜川合戦で知られる越前一揆の蜂起は、本願寺実如<sup>※5</sup>が、従来から友好関係にあった幕府管領細川政元から懇請されたことによる。当時政元と対立していた前將軍10代足利義材（後の義隆）を支援する畿内・東海・北陸の守護勢力の領国に対し、その足許を脅かす目的から、本願寺門徒の蹶起を指令したという、政争の中で引き起こされたものであった。

『東寺光明講過去帳』によれば、永正3年7月に、越前を含む畿内・北陸・東海の諸国で、本願寺派門徒による大規模な一揆が起っていたことが知られる。さらに公家の中御門宣胤の日記（宣胤卿記）には、越前で土一揆が起っていることが京都に伝わっており、一揆衆は本願寺門徒（一向衆）と、先に越前の支配権をめぐって朝倉氏との抗争に敗れ、加賀に亡命していた前越前守護代の甲斐氏の残党（甲斐牢人）から構成されていたとある。結果は、朝倉氏方が勝利し、一揆方の死者は1万人に及んだとみえる。戦いは10月まで続いたものの、越前での騒乱は、8月中旬頃には既に静謐化していた。



【越前朝倉氏系図】



【九頭竜川合戦図】

※4 本願寺第8世法主蓮如が、比叡山延暦寺などの迫害から逃れ、北陸における浄土真宗布教の拠点として文明3（1471）年に建立した道場。吉崎御坊ともいう。

※5 本願寺第9世。父蓮如による門徒宛の手紙を「御文」として流布させる一方で、加賀ですでに主導権を掌握していた門徒に軍事行動を促していた。反細川方の越前朝倉氏、能登畠山氏、越後長尾氏等の北陸の守護勢力に対して、門徒衆に一揆の一斉蜂起を命じ、越中では一揆衆を討つために攻め入った越後の守護代長尾能景（よしかげ 謙信の祖父）が般若野の戦いで討死している。